

川越ゆかりの美の巨匠たち2 日本画家・久保提多

左の絵は、「聖尼格刺図」と題された大変不思議な作品です。赤い服の印象のあるサンタクロースを、なんと水墨で画面いっぱいに描いています。作者の久保提多(1885〜1955)は、画家としては無名ですが、「こんな画家が川越にいたのか」と驚かされる非凡な画技を備えた人物でした。

青森県出身の提多は、明治37年(1904)、東京美術学校日本画本科に特待生として入学します。4年後、同校を首席で卒業し、故郷青森の中学教諭となりますが、画業に専念すべく再上京。しかし、不況により大正6年(1917)に再び教諭となり、その翌年、県立川越中学校(現在の県立川越高校)に転任し退任まで同校で図画を教えました。教員を本分とする提多は、作品を展覧会には出品しませんでした。現在知られる作品の多くが晩年の作です。作風に彼が傾倒した狩野芳崖に連なる明治期の趣が漂うのは、流行に左右されずに自身の理想を追求できたからでしょう。

現在、川越市美術展覧会で優れた日本画作品に授与される「久保提多賞」は、提多の死後、遺族からの寄附を契機に設定された賞で、提多の功績を象徴しています。市内在住の鈴木常雄さんから



久保提多「聖尼格刺図」昭和13年

寄贈された「聖尼格刺図」は、12月20日(木)から来年2月11日(祝)までの常設展第4期で、公開を予定しています。



川越いもの代名詞と言われた「紅赤」

紅赤は、明治31年(1898)に木崎村針ヶ谷(現在のさいたま市)の主婦・山田いちが、自分の畑で八つ房という品種から突然変異した新品種を発見し、広めたサツマイモです。後に親戚の吉岡三喜蔵によって「紅赤」と命名されます。

味が優れていたため東京で評判となり、その後、関東地方でも広く普及し、戦前は、東日本を代表する品種となりました。川越周辺でも、明治時代末期から大正時代にかけて紅赤の栽培が始まり、主流となりました。戦中は、収穫量が多い別の品種に一時変わりましたが、戦後復活した紅赤は「川

越いもの代名詞」「サツマイモの女王」とまで言われました。しかし、昭和50年代に入り、栽培しやすい新品種の紅アズマなどが登場すると、栽培面積が急激に減り、今ではめったに手に入らない品種となってしまいました。



山田いち(肖像画)

今年は、紅赤が発見されてから120年を迎える年。将来への生産保存のためにさまざまな記念事業が企画されています。

この時期に市内の直売所などで購入できる主な川越産野菜

キュウリ、ホウレンソウ、ナス、コマツナ、ネギ、サトイモ、ゴボウ、カブ、ダイコン、サツマイモ、ハクサイ

今年の開催は10月20日(土)・21日(日)。19台の山車が参加予定です。どうか今年は、爽やかな秋晴れのもと開催できますように。



昨年の山車巡行の様子

い出されます。

川越まつりとは違う一面を見られたことが思い出されます。今年の開催は10月20日(土)・21日(日)。19台の山車が参加予定です。どうか今年は、爽やかな秋晴れのもと開催できますように。



季節が夏から秋へと移り変わる9月。全国的に記録的な猛暑が続いた7・8月から打って変わり、9月は雨の日が多い1か月となりました。涼しさを感じる日が増え、特に9月後半は、気温がぐっと下がる日もあり、秋の訪れを感じます。

川越の秋のメインイベントといえば、もちろん「川越まつり」。昨年の川越まつりは、あいにくの雨模様となってしまうましたが、雨が

編集後記
どんぐり

広報川越1424

発行日/平成30年10月10日(毎月10日・25日発行)

発行/川越市 〒350-8601 埼玉県川越市元町1丁目3-1 <http://www.city.kawagoe.saitama.jp/>
049-224-8811(代表) 049-225-2171

編集/広報室

私的利用の範囲を除き、記事や写真の無断転載を禁止します。

この印刷物は、グリーン購入法に適合する紙を使用し、印刷用の紙へ、リサイクルできます。

リサイクル適性(A)

Fontworks
UDFont

「声の広報川越(CD)」 「点字広報川越」を作成しています。ご希望の方は、広報室までご相談ください。
0224-5495 0225-2171